

## 楊雄の詩經學——『法言』を中心として——

嘉瀬達男

### はじめに

漢末から新にかけての人、楊雄は多數の多様な作品を遺しており、その思想の中心には儒學がある。作品の中では經書の語句や表現を好んで援用し、復古的な思想を表現している。しかしながら楊雄の儒學がどのように形成されたのか、その實態はほとんど分かっていない。とりわけ經學に對する深い造詣がどのようにして獲得されたのかという問題は、楊雄の思想や文學を考える時、きわめて重要な意味をもつ。そもそも楊雄は、いつ、どこで、どのような經書を學んだのか。それはどのような方法で習得され、その目的はどこにあったのだろうか。こうした疑問について答えようとしても、現在は推測を重ねることしかできない。

『漢書』本傳に見られる自序に「雄少くして學を好み、章句を爲めず、訓詁通ずるのみ。博覽にして見ざる所無し」とあり、早くから多數の書物に親しんだことはわかるものの、訓詁を學んだ程度で、章句を習い覚えることはなかつ

たと述べている。具體的に名家の師より弟子として何らかの經書を教授された形跡は見つかからない。ただ、若い時に成都で嚴遵に師事したと伝えられる<sup>①</sup>。嚴遵は卜筮をよくし、『老子』を教授した隱士風の人物である。また「答劉歆書」に一年間石室の書の閱覽が許されたとあるので、宮中の書物によって經學の理解を深めたことが推し量られるばかりである。

楊雄の經學に關しかつて筆者は『法言』の表現——經書の援用と模倣——という小論を發表している。そして『法言』に援用された經書の字句について援用法を比較し、その工夫に全體的な検討を加えた。そこで得られた理解を踏まえ、今回は楊雄の經學についてより深く探りたい。特に今回は楊雄の詩經學について調査を進めることとする。それはまた、拙論「論揚雄的「趙充國頌」」「楊雄「元后誅」の背景と文體」によって楊雄の文章に見られる『詩經』の語句を調査し、楊雄にとって『詩經』がきわめて重要なことを明らかにしているからである<sup>③</sup>。しかし楊雄は多數の様々な作品を表しており、全ての作品を押し並べて論ずるのは容易ではない。そこで小論では晩年の作であり、楊雄の學問の到達點と見なすことができる『法言』を主たる検討對象に選ぶこととする。

### 『法言』に見る楊雄の詩經學

『法言』が『詩經』を明らかに援用する章は數十章に及ぶであろうが、まずその中でも典型的な例を見よう。

小雅の「小宛」に「螟蛉に子有り、蜾蠃之を負ふ。爾の子に教誨し、式て穀く之を似がしめよ（螟蛉有子、蜾蠃負之。教誨爾子、式穀似之）」という句がある。「螟蛉」は桑蟲であり、「蜾蠃」はジガバチのこと。ジガバチは桑蟲の子供を育てることがあると考えられていたので、桑蟲の子を教え諭してジガバチの跡繼ぎにせよ、と詠われているのである。

この句を踏まえるのが『法言』の次の章である。

螟蠕<sup>④</sup>之子殪而逢蜾蠃。祝之曰「類我、類我。」久則肖之矣。速哉、七十子之肖仲尼也。（學行）

螟蠕の子殪<sup>たふ</sup>れて蜾蠃に逢ふ。之を祝して曰く「我に類<sup>に</sup>よ、我に類よ」と。久しくして則ち之に肖<sup>に</sup>る。速やかなるかな、七十子の仲尼に肖たること。

ジガバチが種類の異なる桑蟲の子供を育ててジガバチに似た子にするという部分は「小宛」にそのまま據り、『法言』では「我に類よ」という願文を加えてはいるものの、章の過半が「小宛」を踏まえている。「小宛」を知らなければ理解できない典型的な典據技法である。楊雄はこの「小宛」に説かれる教育のもつ意義に感じ入ると同時に、孔子が七十弟子に行った教育を想起して兩者を結び付けた。孔子の教育は、「小宛」に説くものと同じであると言うことで、「小宛」の經典としての意義をも示したのである。このように本章は、「小宛」の句と孔子の行った教育を結び付けた點に意味がある。むしろ「小宛」の句と孔子の行った教育を結び付けた點以外、特筆するほどの新見や思想は讀みとりがたい。つまり本章は、「小宛」の句を孔子の教育に結び付け、新たな表現を作り出すことを目的としており、楊雄の新見や独自の思想を述べることは目的としていない。既に『法言』の表現——經書の援用と模倣——にて論じた、經書の句を取り込み、利用して新たな表現を作り出すとする章であり、その中でも『詩經』に大きく依存する章と考えられる。

次にもう少し手の込んだ章を見てみよう。

或問「爲政有幾。」曰「思斂。」或問「思斂。」曰「昔在周公、征于東方、四國是王。召伯述職、「蔽芾甘棠」。其思矣夫。齊桓欲徑陳、陳不果內、執轅濤塗。其斂矣夫。於戲、從政者審其思斂而已矣。」或問「何思、何斂。」曰「老人老、孤人孤、病者養、死者葬、男子畝、婦人桑。之謂思。若汚人老、屈人孤、病者獨、死者逋、田畝荒、杼軸空、之謂斂。」（先知）

或ひと問ふ「政を爲すに幾有るか」と。曰く「思ふと斂はるるとなり」と。<sup>⑤</sup>或ひと問ふ「思ふと斂はるるとを」と。曰く「昔在周公、東方を征し、四國是れ王（匡）<sup>⑥</sup>し。召伯述職し、「蔽芾たる甘棠」と。其れ思はるるかな。齊桓の陳に徑せんと欲するも、陳果たして内れず、轅濤塗を執ふ。其れ斂はるるかな。於戲、政に従ふ者は其の思ふと斂はるるとを審らかにせんのみ」と。或ひと問ふ「何ぞ思はれ、何ぞ斂はるるか」と。曰く「人の老を老とし、人の孤を孤とし、病者は養はれ、死者は葬られ、男子は畝し、婦人は桑す。之を思はると謂ふ。人の老を汚し、人の孤を屈し、病者は獨りにして、死者は逋（逋）され、田畝は荒れ、杼軸は空しきがごときは、之を斂はると謂ふ」と。

この章で述べられるのは、政治の樞要（「幾」）が、人々に思い慕われるか、厭われるかの違いにあるという主張である。それを證すために『詩經』三篇と『春秋公羊傳』の記事を典據に用いている。

まず「昔在周公、征于東方、四國是王」は、豳風「破斧」の「周公東征、四國是皇。哀我人斯、亦孔之將（周公東征し、四國を是れ皇す。我が人を哀しむこと、亦孔だ之れ將なり）」に見える周公の思い慕われたさまを踏まえており、「召伯述職、蔽芾甘棠」は、召南「甘棠」に見える「蔽芾甘棠、勿剪勿伐、召伯所茇（蔽芾たる甘棠、翦る勿れ伐る勿れ、召伯の茇りし所）」というよく知られた故事を踏まえる。「齊桓欲徑陳、陳不果內、執轅濤塗」というのは、『春秋公羊傳』

僖公四年に見える事件である。<sup>⑦</sup>そして最後の「杼軸空之」は小雅「大東」の「小東大東、杼軸其空（小東大東、杼軸其れ空し）」という句に據る。思い慕われた周公、召伯と、厭われた齊桓公の差異を『詩經』『春秋』を根據に指し示している。

この先知篇と同様に召南「甘棠」を引いて召伯の政治を讃える文が、『說苑』貴德にある。

聖人之於天下百姓也、其猶赤子乎。飢者則食之、寒者則衣之、將之養之、育之長之、唯恐其不至於大也。詩曰「蔽芾甘棠、勿剪勿伐、召伯所茇。」傳曰「自陝以東者、周公主之、自陝以西者、召公主之。」召公述職、當桑蠶之時、不欲變民事、故不入邑中、舍於甘棠之下而聽斷焉。陝間之人、皆得其所。是故後世思而歌詠之。善之故言之、言之不足、故嗟歎之、嗟歎之不足、故歌詠之。夫詩、思然後積、積然後滿、滿然後發、發由其道而致其位焉。百姓歎其美而致其敬。甘棠之不伐也、政教惡乎不行。孔子曰「吾於甘棠見宗廟之敬也甚矣。思其人必愛其樹、尊其人必敬其位、順安萬物。古聖之道幾哉。」

聖人の天下の百姓に於けるや、其れ猶ほ赤子のごときか。飢うる者には則ち之に食はせ、寒ゆる者には則ち之に衣せ、之を將ひ之を養ひ、之を育て之を長て、唯だ其の大に至らざることを恐る。詩に曰く「蔽芾たる甘棠、翦る勿れ伐る勿れ、召伯の茇りし所」と。傳に曰く「陝より以東は、周公之を主り、陝より以西は、召公之を主る」と。召公述職し、桑蠶の時に當り、民事を變ずるを欲せず、故に邑中に入らず、甘棠の下に舍りて聽斷す。陝間の人、皆其の所を得。是の故に後世思ひて之を歌詠す。之を善とするが故に之を言ひ、之を言ひて足らず、故に之を嗟歎し、之を嗟歎して足らず、故に之を歌詠す。夫れ詩は、思ひて然る後に積み、積みて然る後に満ち、満ちて然る後に發し、發するには其の道に由りて其の位を致す。百姓其の美を歎じて其の敬を致す。甘棠の伐られざるや、

政教悪くに行はれざらん。孔子曰く「吾甘棠に於いて宗廟の敬の甚しきを見る。其の人を思へば必ず其の樹を愛しみ、其の人を尊べば必ず其の位を敬ひ、萬物を順安す。古聖の道幾いかな」と。

ここでは赤子を育てるような聖人の政治を召伯が行い、後の人が思い慕って「甘棠」を詠ったことが述べられている。このように「詩に曰く」として引用を導くのがこの當時の通例である。先知篇がいかに詩句を會話の中に溶け込ませ、調和させているか、援用方法に大きな隔たりがあることは明白であろう。

### 楊雄と四家詩

以上において『法言』がどのように『詩經』を援用しているのか、その状況や方法は概ね理解できた。次には『法言』が援用する『詩經』とはどのようなものであるのか、當時の詩經學との關係を探りたい。前漢の詩經學と言えば、齊詩・魯詩・韓詩の今文の三家詩と古文の毛詩があったこと、贅言する必要はなからう。では『法言』に見られる詩經説はこの四家詩のいずれかに従っているのだろうか。楊雄が四家詩のいずれかの師承を受けたことを示す根據は見当たらない。既に見た通り、ただ多數の篇章に詩句が援用されているばかりである。

これまでに汪榮寶は『法言義疏』において『法言』の詩説を丹念に調査している。その結果、楊雄の詩説はほぼ魯詩に基づくと結論付けている。まずこの汪榮寶の考證結果について検討したい。小論にて先に取り上げた學行「螟蠅之子」章の義疏で、汪榮寶は次のように述べている。

子雲於『詩』多用魯義、本篇「正考甫嘗睇尹吉甫矣」、吾子「夏屋之爲帡幪」、先知「周公東征、四國是王。召伯述職、蔽芾甘棠」、孝至「周康之時、頌聲作乎下、關雎作乎上」皆是。疑此文云云、卽本「小宛」『魯故』。

汪氏は、楊雄が學行篇の「正考甫嘗睇尹吉甫矣」のほか、吾子篇、先知篇、孝至篇の三章において魯詩を用いているので、この「螟蠶之子」章も小雅「小宛」の『魯故』<sup>⑩</sup>に據るものと考えている。そこで汪氏が挙げる四章について、『法言』は果たして魯詩を用いているのかどうか検証してみたい。

【先知篇「周公東征、四國是王。召伯述職、蔽芾甘棠」章】

まず前節にて取り上げた、先知篇「周公東征、四國是王。召伯述職、蔽芾甘棠」章の義疏を見てみよう。「破斧」の「周公東征、四國是王」について汪氏は次のように言う。

子雲説詩、皆用魯義。此以「周公東征」與「召伯述職」竝舉、是亦以「破斧」爲黜陟時之作、其以此爲思義之證、卽用東征西怨、南征北怨之説。

「周公東征」はそもそも周公の遠征を言うものだが、『法言』はそれを「甘棠」に詠われる召伯の裁斷の的確なさまと竝べ連ねている。それは「周公東征、四國是王」を、周公が諸國を巡視して人事考課を行ったことと解釋するからである。本章は、周公と召伯の正義に基づいた判斷を諸國みな慕ったことを述べるものと、義疏は考えている。汪氏の説は陳壽祺・陳喬樞『魯詩遺説攷』に基づくから、次に陳氏の説を挙げる。

何邵公述「破斧」詩義、與『白虎通』合。公羊家用齊詩、邵公則用魯詩者、是此篇齊・魯說同矣。『荀子』言「周公南征而北國怨、東征而西國怨」、即魯詩之義所本也。（卷二）

陳氏は、齊詩を用いる『公羊傳』と魯詩を用いる何休解詁は一致しているので、「破斧」の齊詩說と魯詩說は同じであると言うのであり、更に『荀子』に說かれるのが魯詩說の原義であると考えている。『公羊傳』『白虎通』『荀子』の文は以下の通りである。

〈公羊傳・僖四〉古者周公、東征則西國怨、西征則東國怨。（解詁）此道、黜陟之時也。詩云「周公東征、四國是皇。」  
 〈白虎通・巡狩〉三歲一閏、天道小備、五歲再閏、天道大備。故五年一巡狩、三年二伯出、述職黜陟。一年物有終始、歲有所成、方伯行國、時有所生、諸侯行邑。傳曰「周公入爲三公、出爲二伯、中分天下、出黜陟。」詩曰「周公東征、四國是皇。」言東征述職、周公黜陟、而天下皆正也。

〈荀子・王制〉周公南征而北國怨、曰「何獨不來也」、東征而西國怨、曰「何獨後我也。」

確かに『法言』が「昔在周公、征于東方、四國是王……其思矣夫」と周公の東征を思い慕われたものと述べるのは、『公羊傳』及び解詁の說によく合う。ならば齊詩とも判斷できそうだが、魯詩を用いる『白虎通』『荀子』の說も齊詩と同じであると陳喬樞は言う。そして楊雄は魯詩に據ると考えるので、『法言』先知篇を『三家詩遺說攷』の中の『魯詩遺說攷』に置くのである。



汪氏は陳氏に賛同してその説を引用し、齊詩・魯詩は同じであるから、先知篇は魯詩に據ると言うのである。しかし果たして齊詩ではなく、魯詩に據るのであるうか。魯詩とする明確な根據は示されていないように思う。

一方召南「甘棠」詩について汪氏は、一五九頁に挙げた『說苑』貴徳の傳（「自陝以東者：召公主之」）に『法言』は基づいていると言う。そしてこの傳は、『說苑』の撰者の劉向が魯詩を伝えるから『魯故』の佚文であろうと考える。更に『漢書』王吉傳所載の上疏も『說苑』の「傳」の内容と合致することを指摘し、王吉は韓詩を傳えているから、韓詩と魯詩は同じだったというのが汪氏の結論である。<sup>⑪</sup>ところが調べてみると『說苑』に引く「傳」は『魯故』の佚文ではなく、『春秋公羊傳』隱公五年の文である。<sup>⑫</sup>『公羊傳』は陳喬樞によれば齊詩であつた。劉向も魯詩のほかに韓詩を學んでいたと考えられている。<sup>⑬</sup>そうすると『法言』の「甘棠」解釋は、齊詩と韓詩に合うことになり、魯詩とする明確な根據を失ってしまうのである。

#### 【學行篇「正考甫嘗睇尹吉甫矣」章】

次に汪氏が『法言』が魯詩に據る根據とする、學行篇「正考甫嘗睇尹吉甫矣」章と孝至篇「周康之時、頌聲作乎下、關雎作乎上」章の義疏を續けて検討したい。この二章の詩説はともに『詩經』成立の問題を論じているからである。

學行篇では「昔、顔は嘗て夫子を睇<sup>ねが</sup>へり、正考甫は嘗て尹吉甫を睇<sup>ねが</sup>へり」という文を魯詩の根據とする。<sup>⑭</sup>顔回が孔子を目標としたように、正考甫は尹吉甫を目標としたという部分である。李軌はこれに注して「正考甫、宋襄公之臣也。尹吉甫、周宣王之臣也。吉甫作周頌、正考甫慕之而作商頌」と述べており、この正考甫が商頌を作詩したという説を汪榮寶は魯詩と斷じるのである。それは『史記』宋世家贊に正考父が商頌を作ったとあり、司馬遷を魯詩説と考えるからである。すなわち『法言』は『史記』の説と同じなので、魯詩に據ると言うのである。<sup>⑮</sup>

確かに司馬遷は孔安國に『尙書』を學んでおり、孔安國は申培に『詩』を學んでいる。そして申培は魯詩を傳えているが、司馬遷が孔安國から魯詩を學んだという記録は見當たらない。<sup>⑩</sup>その上、この贊の裴駰集解には「韓詩商頌章句亦美襄公」とあり、『韓詩章句』が襄公を讃えていると言う。この集解に對して汪榮寶は、「是韓義同魯、『法言』多魯詩說、故亦以商頌爲正考甫作」と、韓詩は魯詩と同じなのだととして、やはり魯詩と主張するのだが、梁玉繩『史記志疑』卷二十は「史公此說實本韓詩、故『法言』學行篇曰「正考甫睢尹吉甫、公子奚斯睢正考甫」」として宋世家贊も『法言』も韓詩と考える。陳喬樞は『史記』宋世家贊と『法言』學行を魯詩とするのだが、特に根據は示していない。

學行篇にはこの句に續けて更に「公子奚斯は嘗て正考甫を睢へり」とあり、公子奚斯が魯頌を作詩したと言う。<sup>⑪</sup>この公子奚斯の魯頌作詩說には問題があり、韓詩說が関わってくるので續けて検討してみよう。公子奚斯の魯頌作詩說は、魯頌「閟宮」詩に「新廟奕奕、奚斯所作」という句があることから議論が始まる。この句によつて『文選』班固・兩都賦序は「故臯陶歌虞、奚斯頌魯」と言い、李善注は「韓詩魯頌曰「新廟奕奕、奚斯所作」。薛君曰、奚斯、魯公子也。言其新廟奕奕然盛。是詩、公子奚斯所作也」と言う。王延壽「魯靈光殿賦」とその李善注にも同様の記述があり、韓詩は明らかに閟宮詩を公子奚斯の作と考えている。<sup>⑫</sup>ところが毛傳は「新廟、閔公廟也。有大夫公子奚斯者作是廟也」と言い、公子奚斯が作ったのは廟であると説き、正義も同じである。その結果、王應麟『困學紀聞』卷三は班固・王延壽と『法言』について「正義云奚斯作新廟。而漢世文人班固・王延壽謂魯頌奚斯作、謬矣。然揚子之言皆本韓詩。時毛詩未行也」と述べ、楊雄の詩說はすべて韓詩に基づくと論じている。それに對して汪榮寶は「據『法言』此文、則知魯詩解奚斯所作爲作詩、與韓詩同」と、『法言』の文に據つて魯詩說が韓詩に同じであると説くにとどまり、陳喬樞も同様である（『魯詩遺說攷』卷六）。

【孝至篇「周康之時、頌聲作乎下、關雎作乎上」章】

孝至篇の「周康之時、頌聲作乎下、關雎作乎上」章は、周の康王の時に「關雎」が作られ『詩』が興ったことを論じている。原文は次のとおりである。

周康之時、頌聲作乎下、關雎作乎上、習治也。齊桓之時、縕而春秋美邵陵、習亂也。故習治則傷始亂也、習亂則好始治也。

周康の時、頌聲下に作り、關雎上に作るは、治に習<sup>な</sup>ればなり。齊桓の時、縕<sup>みだ</sup>れて春秋に邵陵を美<sup>ほ</sup>むるは、亂に習ればなり。故に治に習れば則ち始めて亂るるを傷み、亂に習れば則ち始めて治まるを好<sup>よろこ</sup>ぶなり。

「關雎」の魯詩説は、『漢書』杜欽傳の上疏に「后妃之制、夭壽治亂存亡之端也。：是以佩玉晏鳴、關雎歎之。知好色之伐性短年、離制度之生無厭、天下將蒙化、陵夷而成俗也。故詠淑女、冀以配上、忠孝之篤、仁厚之作也」とあり、顏師古注に「李奇云「后夫人雞鳴佩玉去君所、周康王后不然、故詩人歎而傷之。」臣瓚云「此魯詩也」」とあることから、康王が淑女を得られず房事のために晏起したことを刺つたものと「關雎」を解している。汪榮寶義疏も「子雲説詩、皆用魯義、故此以關雎爲刺康王之詩、而云「作乎上」、亦即大臣刺晏之説」と、刺詩としている。陳氏『魯詩遺說攷』（卷一）も同様で、この『法言』孝至篇が魯詩に合うことから、楊雄は魯詩であると斷じている。

他方、『毛詩』は序に「關雎麟趾之化、王者之風。故繫之周公。……周南召南、正始之道、王化之基。是以關雎樂得淑女以配君子、愛在進賢、不淫其色。哀窈窕思賢才而無傷善之心焉。是關雎之義也」と言うよう、王者の教化の始

めとして「關雎」を解する。

確かにこの章は魯詩に合う。ただし韓詩・齊詩に異説なく、三家詩のいずれとも判断しがたい。<sup>19)</sup>

### 【吾子篇「夏屋之爲帡幪」章】

最後に吾子篇の「夏屋之爲帡幪」章を検討しよう。『法言』の原文は「震風陵雨、然後知夏屋之爲帡幪也。虐政虐世、然後知聖人之爲郭郭也」というものである。「夏屋之爲帡幪」とは大きな建物が覆って（暴風雨から）守ってくれるということであり、この中の「夏屋」という語が秦風「權輿」に基づくのである（「於我乎夏屋渠渠、今也每食無餘」）。そしてこの「夏」字と「屋」字の字義をめぐる四家詩の所説が議論の対象になる。

汪榮寶は「按、魯、韓皆以夏屋爲宮室之事。『楚辭』哀郢王注云「夏、大殿也」……又招魂云「夏、大屋也」……『淮南子』本經高注云「夏屋、大屋也。」高・王皆用魯詩、此訓當出魯故」と述べ、魯詩の王逸と高誘の説に合うので楊雄が魯詩を學んだと考える。ただし、毛傳に「夏、大也」と言うのとも合う。韓詩について義疏は「『通典』五十五引韓詩云「殷、商屋而夏門也。」又引傳云「周、夏屋而商門。」則韓詩雖不以夏爲大、而以屋爲屋宇則同」と「屋」字の解釋が魯詩と同じであることを指摘する。そうすると『法言』の「夏屋」に關する解釋は、魯詩の王逸と高誘に最も合うが、毛詩や韓詩とも異なっていないと考えられる。

以上の通り、汪榮寶が楊雄を魯詩説であるとする章の義疏を検討してみたが、楊雄が魯詩説に基づいているという確信は得られなかった。陳喬樞『三家詩遺說攷』や王青『揚雄評傳』（南京大學出版社、二〇〇〇年、七五頁）も楊雄を魯詩説としているが、論據は汪榮寶とほぼ同じであるから改めて論じない。むしろ梁玉繩や王應麟が言うように韓詩説

に據っている場合もあるように思われる。しかし結局のところ唐晏『兩漢三國學案』のように四家詩のいずれかに定めず、「博習群經、不名一藝」(卷十一・明經文學傳序)と判斷するのが妥當なのではあるまいか。<sup>⑩</sup>古文系の毛詩よりは、今文の魯詩もしくは韓詩說に近い場合が多いと思われるが、四家詩のうちの一家に定めるのは困難というのが本節の検討結果である。

### 『法言』の詩經學の特色

『法言』の詩說がいずれの一家とも定め難いことは、楊雄に『詩經』の名家との師承の關係がなかったことを想定させる。既に引いたように楊雄は自序に「章句を爲めず、訓話通ずるのみ」と明記しているから、師法傳授の盛行した前漢にあっても、特定の詩說のみを支持したと考えるべきではないのかもしれない。複数の詩說を學んでいた可能性さえ考えられる。楊雄の當時、各家の詩說は煩瑣になっており一人で全ての詩篇を學ぶことができず、大小雅や三頌に分けて學ぶこともあったと言うから、<sup>⑪</sup>部分ごとに異なる四家の詩說を學ぶこともできたかもしれない。當時の經學が過度に煩瑣であったことは、『法言』寡見篇でも次のように批判されている。

或問「司馬子長有言、曰「五經不如『老子』之約也、當年不能極其變、終身不能究其業。」」曰「若是則周公惑、孔子賊。古者之學耕且養、三年通一。今之學也、非獨爲之華藻也。又從而繡其輦輶、惡在老不老也。」或曰「學者之說可約邪。」曰「可約、解科。」

或ひと問ふ「司馬子長に言有り、曰く「五經は『老子』の約にしかざるなり。當年其の變を極むる能はず、終身其

の業を究むる能はず」と。曰く「是くのごとくんば則ち周公は惑ひ、孔子は賊そくなふなり。古者の學は耕し且つ養ひ、三年にして一に通ず。今の學や、獨り之が華藻を爲すのみに非ざるなり。又た從ひて其の輦輓に繡す。惡くんぞ老不老に在らんや」と。或ひと曰く「學者の説は約すべきか」と。曰く「約すべし、科に解け」と。

ここでは、古えは三年で一經に通じたものが、今では經典を飾りたてるばかりか、付屬品のハンケチにまで刺繡を施していると、當時の經學に痛烈な批判を加え、反發する姿勢が見て取れる。そしてその要點をこそ學ぶべきであるというのであるから、楊雄の經學は當時の博士や名家の微に入り細を穿つような學問とは異なり、經書の要點や主旨を學ぶことを中心としたのであろう。

しかし楊雄の詩經學が、名家より師承を受けず、一家の學に據らずに、ただ要點や主旨を學ぶものであったなら、その方法に果たして問題はなかったのだろうか。一人で全ての詩篇を學ぶことができないと言われた時代に、楊雄は詩篇を盡く正確に習得することができたのだろうか。詩篇の理解に多少の混亂や誤解もあったのではないだろうか。次の章を検討してみたい。

吾子篇に「或問「蒼蠅紅・紫。」曰「明視。」問「鄭・衛之似。」曰「聰聽。」或曰「朱・曠不世、如之何。」曰「亦精之而已矣」という章がある。「蒼蠅（アオバエ）」「紅・紫」「鄭・衛」を正しく區別し、たとえ離朱・師曠といった古えの視力・聴力に優れた者が世になくとも、精確に判斷するよう説くのである。そのうち「蒼蠅」という語が『詩經』に基づくのだが、この語は齊風「雞鳴」に「雞既鳴矣、朝既盈矣。匪雞則鳴、蒼蠅之聲」とあるもので、朝方に「雞鳴」と混同したと詠われる語である。他方、小雅「青蠅」には「青蠅」という語が用いられ、「營營青蠅、止于樊。豈弟君子、無信讒言」と詠われている。この「青蠅」は「佞人」のことを意味し、「忠臣」と區別されるべきも

のとして詠み込まれている。それならば『法言』は、齊風「雞鳴」の「蒼蠅」ではなく小雅「青蠅」に據っているのであり、「蒼蠅」ではなく「青蠅」を問うべきではないのか。つまり楊雄が「青蠅」と誤って「蒼蠅」の語を用いた可能性が指摘できるのである。勿論、表現の上で「青」字より「蒼」字を好んだ、もしくは故意に文字を改めた可能性もあるが、他の部分の援用が正確であるのに比べ、『詩經』の援用としては不正確であると思われる。

他方、楊雄の詩經學が特定の一家に據らなかったことの利點も指摘できよう。小論の始めに掲げた學行篇や先知篇の例が、經書の句を取り込み新たな表現を作り出すことができたのは、まさに一家の學に據らなかったからではあるまいか。煩瑣な章句の學を治めていなかったからこそ、章句にとらわれず「經文を自在に散りばめ、文中に溶け込ませた表現」(『法言』の表現―經書の援用と模倣)が實現できたように考えられるのだ。それに比べ『說苑』貴徳が「詩に曰く」として引用を導いていたのは、『韓詩外傳』などと同様の援用方法であり、經書の章句を遵守するものと言えよう。更に言えば、『法言』先知は『詩經』の語を援用して議論を開始するのだが、『說苑』貴徳は議論の後に結論の正當を裏付けるために『詩經』の語を引用している。その結果『說苑』における『詩經』は、議論を統制する規範としての効果を保持している。それに對し『法言』の『詩經』は、典據技法を生み出す文章技巧としての效用がある。ただし學行篇の例(小論一五七頁)が『詩經』の句を取り入れることに傾注し、新見に乏しいことは問題であった。前段の吾子篇「或問「蒼蠅紅・紫」」章も同様の評價が下せよう。

『法言』の詩經學の特色として、『詩經』の援用に偏向のあることも指摘しておきたい。『詩經』の中でも大小雅と三頌の援用が目につくのである。小論で取り上げた詩篇では國風と雅頌はほぼ同數で、現存する『詩經』の割合と變わりはないが、小論に引用していない例も含めると明らかに國風よりも大小雅および三頌の援用が多い。特に辭賦や文章に援用される例を加えると、より明確になる。<sup>22</sup> 楊雄が國風よりも雅頌を好んだことは、學行「正考甫嘗睇尹吉甫

矣」章において周・魯・商頌の作詩者の問題を取り上げていたことから察することもできるし、既に拙論に論じた通り、「趙充國頌」が小雅「常武」を典據とし、「元后誅」に雅頌の語を多數引いていたことから理解できる。それは先知「或問爲政有幾」章、學行「正考甫嘗睇尹吉甫矣」章、孝至「周康之時、頌聲作乎下、關雎作乎上」章などから読み取れるように、周王朝への敬慕の念の表れであろう。

### 楊雄詩經學の來歴

以上、『法言』における『詩經』援用の實態について検討を加え、博士などの名家より師承を受けていない可能性の高いことを指摘した。それでは楊雄はどのようにして『詩經』を習得したのだろうか。習得した時期や場所、方法について考えてみたい。

初めに當時の詩博士、學生の狀況を確認しておきたい。楊雄が前半生を送った元帝・成帝期の狀況を一瞥してみよう。元帝は張游卿や高嘉より魯詩を受け、成帝は伏理より齊詩を受けており、<sup>23)</sup>詩博士は元帝期の齊詩に翼奉・匡衡・師丹、魯詩に江翁・褚少孫・義倩、韓詩に長孫順が、成帝期の齊詩に師丹、魯詩に許晏がいたと考えられる。<sup>24)</sup>しかしいずれの人物も楊雄と直接の関わりは見出せない。また、三家詩の勢力に甚だしい差異はなかったようである。地理の上でも齊詩、魯詩は東部、韓詩は北部で隆盛しており、楊雄の居所巴蜀から遠く離れている。博士弟子は元帝期に千人、成帝末には三千人と増員しているが、<sup>25)</sup>楊雄への影響はよくわからない。

次に巴蜀の狀況に目を移そう。『史記』『漢書』儒林傳に巴蜀の名家は記されていない。ただ趙賓なる人物が『易』を修めたという記事が『漢書』に見えるのみである。<sup>26)</sup>ところが『後漢書』の儒林傳になると『詩經』だけでも齊詩に



蜀郡の任末、廣漢の景鸞、韓詩に健爲の杜撫、巴郡の楊仁といった名家が現れる。恐らくは次に述べる蜀の文教政策が効果をあらわしたのであろう。

景帝の末、文翁なる人物が蜀の太守となり、教化を進めて功績があったという。學官を成都に建てて教育を行い、人々は争って子弟を入學させ、また張叔や司馬相如ら十餘人を選んで京師に派遣している。彼らは博士より學業を受け律令を學び、七經を授かったと伝えられている。<sup>27</sup>張叔は武帝期になると、博士として招かれ、天文災異を明らかにし、始めて『春秋章句』を作ったらしい。<sup>28</sup>その後の蜀出身の人物として王褒がいるが、楊雄の生まれた前五三年には既に没している。楊雄の學問に影響を与えた蜀の人と言えば、先に挙げた嚴遵の名は外せない。若い頃に楊雄が從つた師として唯一その名の傳わる人物であり、楊雄もしばしば表彰する存在だからである。「博覽にして通ぜざるは亡し」と稱される嚴遵であるが、その學は『易』と老莊を主としており、殘念ながら『詩經』との關連は不明である。<sup>29</sup>『法言』問明には嚴遵と對比して楚の龔勝、龔舍という人物に言及する一章がある。龔勝、龔舍は魯詩の名家であるから、楊雄との關係を慎重に檢證する必要がある。

楚兩龔之絜、其清矣乎。蜀莊沈冥。蜀莊之才之珍也、不作苟見、不治苟得、久幽而不改其操。雖隨・和何以加諸。舉茲以旃、不亦寶乎。吾珍莊也、居難爲也。不慕由、卽夷矣。何龔欲之有。

楚の兩龔の絜きよきこと、其れ清なるか。蜀の莊は沈冥なり。蜀の莊の才の珍なるや、苟あらはも見るるを作さず、苟も得るを治めず、久しく幽して其の操を改めず。隨、和と雖も何を以て諸に加へん。茲を舉こげ旃これを以もちへば、亦た寶ならずや。吾の莊を珍とするは、爲し難きに居ればなり。由を慕はずんば、卽ち夷。何の龔欲か之れ有らん。

初めの一文以外は全て嚴遵を讃える章である。楚の兩龔と呼ばれる龔勝、龔舍は節義を重んじた人として名高く、『漢書』の本傳に成帝・哀帝期の活躍が描かれている。龔勝は歐陽尚書と魯詩、龔舍は魯詩を受け五經に通じていたと言う。楊雄との關係を考えてみると、二人の出身は楚の彭城と武原であり、現在の江蘇・山東兩省が境界を接する地域にある。楚と長安を行き來していたようであるから、楊雄との接點があるとすれば長安でのことであろう。本傳に據れば龔勝を長安に呼んだのは蜀出身の何武という人物である。何武と楊雄の關係については拙論「蜀における楊雄の處世と學問」(前出)にて論じたことがある。何武は楊雄と同じ縣の出身で二十歳の年長、成帝期には三公となりながら、楊雄と交流した痕跡が見いだせなかった。何武は王莽と敵對したために、楊雄と交わる機會の稀な存在と考えられた。龔勝は何武の推薦を得て上京し、龔舍は龔勝に推薦されて朝廷に進んでいるから、兩龔は何武との關係が強く、反王莽派であつたと思われる。ならば楊雄とも敵對した可能性がある。こうした背景を考慮し、改めて前掲『法言』の文を見てみよう。果たして「楚の兩龔の繋きこと、其れ清なるか」とは、兩龔を讃えているのだろうか。この一文は感嘆表現ではなく、疑問もしくは反語表現なのではあるまいか。つまり兩龔などは嚴遵に比べれば世に稱賛されるほどの存在であろうか、と述べているように讀めるのである。だからこの一文以外は全て嚴遵への讃辭となっているのではないだろうか。そして兩龔と楊雄を結びつける根據が、この章以外に見当たらないことも、楊雄の兩龔への無關心を示している。そうすると楊雄が兩龔より魯詩を授かつた可能性は考えにくいようである。

楊雄との交流が考えられ、『詩經』を治めた人物といえは劉向と劉歆の名が思い浮かぶ。劉氏父子は楚元王以來、魯詩を家學としていた。ただし劉向は既述の通り韓詩も學んでいたと考えられ、劉歆は毛詩を學官に立てようと建議し、「移書讓太常博士」によつて博士の師承の學を非難してもいる。特に劉歆とはともに黃門に給事したこともあり、楊雄との往復書簡が遺つて<sup>⑩</sup>いる。更にその子劉棻に楊雄は奇字を作ること<sup>⑪</sup>も教えている。これほど親密な關係にあつ

た劉歆より影響を強く受けたであろうことは間違いないが、彼らより『詩經』の學を授かったとは考えにくい。なぜなら兩人とも皇族であり、人に學問を教授した形跡がない。もし楊雄が師として學んでいたのであれば、何らかの形跡がありそうだが、一片の傳承すら見当たらない。相互に『詩』に關する部分的な議論などはあったかもしれないが、師承に相當する關係をもった可能性は低いものと判斷できる。

楊雄の詩經學と關わりがあるかもしれない人物に侯芭という者がいる。『漢書』楊雄傳贊に據れば、冀州・鉅鹿の人で常に雄に従い、『太玄』『法言』を受け、楊雄のために墳丘を作り三年の喪に服したと言う。楊雄の弟子と見なすこともできるのだが、『隋書』經籍志に「韓詩翼要十卷、漢侯芭傳」とあり、姚振宗『隋書經籍志考證』はこの「侯芭」が「侯芭」のことであると論じている。<sup>⑪</sup>『韓詩翼要』を編じたのが侯芭であるならば楊雄と韓詩とのつながりが考えられるが、それ以上のことはわからない。

『詩經』から少し離れるものの、楊雄と經學の關わりを考える時、氣になるのが張竦という人物である。楊雄の「答劉歆書」に張竦が『方言』を稱贊したことが記されているほか、『漢書』游俠傳には陳遵が楊雄の『酒箴』を引いて張竦を揶揄した話が見える。張竦は祖父の張敞、父の張吉とともに小學の名家である。そして杜鄴・杜林父子とは縁戚關係にあり、兩家の間で小學を相互に傳授している。また張敞は『春秋左氏傳』、杜林は『漆書古文尚書』をも學んだ經學家であり、杜林は劉歆とともに楊雄を絶贊した范逵の同僚でもある。<sup>⑫</sup>楊雄と直接關わるのは張竦一人であるが、張竦を起點に廣く他の經學家と結び付くのである。詩經學からは距離があるが、楊雄が經學を習得する過程を考えるには重要な事實と思われる。

## 終わりに

以上のように楊雄の周邊を調査しても詩經學の名家との明確な師承關係を見出すことは困難である。それではどのようにして『詩經』を習得したのかと言えば、まず考えられるのは獨學であろう。初めに述べた通り、楊雄は一年間、宮中の書物の閲覽が許されているので、書物によって詩經學の理解を深めることは可能であつたろう。晩年には天祿閣にて校書作業も行っていることからみても（『漢書』楊雄傳贊）、日々書物とともに過ごしていたものと思われる。ただし獨學のみでは限界もあろう。恐らく蜀では文翁が建てた學官に通い、また短期的には私塾や個人に學んだのであろう。嚴遵に師事したというのもその一過程である。前節で検討した通り、當時楊雄の周邊をとりまく詩經學の狀況から考えても、『詩經』について一定程度の學識のある人物に習うことに困難があつたとは思われない。漢志に「俗師」や「閭里書師」という語が見え、<sup>33</sup>初學者を對象とした民間の識字教育者を意味している。小學の分野では特に民間教育の需要は高かつたことであらう。私塾もあつたに違いない。經學についても、博士などの名家ではなくとも在野の師に學ぶことはあつたはずである。

そうすると楊雄の『詩經』に關する學識は、習得方法に比し相當に水準の高いものであつたと評價できよう。小論にて檢證した『詩經』の學殖が、名家や博士に師事することなく獲得されたのだとすれば、相應の刻苦を経たものと思われる。そして他の經書についても同様のことが考えられる。楊雄の作品には『書經』や『春秋』、『論語』などもしばしば援用される。しかしいずれも師承を得てはいないことを思えば、習得された學力は驚くべき水準に達していたと評價できよう。

楊雄の經學習得過程について更に踏み込んで考えるなら、小學を得意としていたことに注目すべきではないだろう。

か。楊雄は小學を蜀地にて嚴遵と林閭翁孺に學んでゐる。二人は隱士の風を備えた人物だが、前半生にて十分な小學の基礎を身につけたことが、後の楊雄の學問に多大な影響を與えたに違いない。小學書として著書『訓纂』と『揚雄蒼頡訓纂』各一篇が漢志に著録されており、『方言』も編纂している。『方言』が小學家の張竦より高い評價を得たことは既に述べた。かの劉歆も「與楊雄書」の中で編纂中の『方言』を絶賛し、速やかに獻上するよう求めている。楊雄と他の經書を結びつける記述はきわめて少ないが、楊雄の小學は當時十分に名高いものであつた。ならば楊雄が經書を習得した際には、この小學の知識が大きくものをいったのではないだろうか。小學の知識を驅使することで、經書の理解を深め、讀書し獨學を進めることができたのではないかと思われる。自序に言う「章句を爲めず、訓詁通ずるのみ」とは、師承を受けないが、小學の知識によつて學問を進めたことを意味するのである。このように楊雄の詩經學は、小學の知識を驅使して習得され、『法言』において典據表現として開花したものと思われる。

#### 注

- ① 『漢書』王貢兩龔鮑傳に嚴君平の名で次のようにある。「（嚴）君平卜筮於成都市：裁日閱數人，得百錢足自養，則閉肆下簾而授『老子』。博覽亡不通，依老子・嚴周之指著書十餘萬言。楊雄少時從遊學，以而仕京師顯名，數爲朝廷在位賢者稱君平德。」
- ② 「答劉歆書」の原文は以下の通り。「雄爲郎之歲，自奏，少不得學，而心好沈博絕麗之文。願不受三歲之奉，且休脫直事之繇，得肆心廣意，以自克就。有詔，可不奪奉，令尙書賜筆墨錢六萬，得觀書於石室。如是後一歲，作繡補・靈節・龍骨之銘詩三章，成帝好之，遂得盡意。」この書簡については、拙稿「楊雄「答劉歆書」譯注」（『立命館白川靜記念東洋文字文化研究所紀要』一、立命館大學白川靜記念東洋文字文化研究所、二〇〇七年）がある。

③ 『法言』の表現——經書の援用と模倣——は『學林』三六・三七號（中國藝文研究會、二〇〇三年）所收。「論揚雄的「趙充國頌」」では「趙充國頌」の藍本を『詩經』大雅・常武と考え（『文選』與「文選學」中國文選研究會編、學苑出版社、二〇〇三年）、楊雄「元后誄」の背景と文體」では、「元后誄」と『詩經』諸篇を比較検討したことがある（『學林』四六・四七號、中國藝文研究會、二〇〇八年）。

④ 汪榮寶『法言義疏』（臺北・藝文印書館、一九六八年）は「螟蛉」、今『毛詩』『爾雅』皆作「螟蛉」、此作「蠅」蓋魯詩異文」と言うが、『廣韻』（青韻）は「蠅、或作蛉」と言う。今は後者に従う。

⑤ この文の「幾」字に李軌は「要也」と注し、「數」字には「厭」と注している。更に汪榮寶義疏は「幾」字について「按弘範讀爲機、故訓爲要」と言うのに従う。

⑥ 後述するように「四國是王」は『詩經』破斧に基づくが、『毛詩』は「四國是皇」となっている。いま、司馬光の集注（『纂圖分門類題五臣注揚子法言』卷六、宋劉通判宅仰高堂刻本影印中華再造善本、北京圖書館出版社、二〇〇三年）に「王當作匡」とあり、齊詩の異文（『呂氏家塾讀詩記』卷十六に「董氏曰、齊詩作四國是匡」）と考えるのに従う。

⑦ 『春秋公羊傳』僖公四年に次のように記されている。「齊人執陳轅濤塗。濤塗之罪何。辟軍之道也。其辟軍之道奈何。濤塗謂桓公曰「君既服南夷矣、何不還師濱海而東、服東夷且歸。」桓公曰「諾。」於是還師濱海而東、大陷于沛澤之中。顧而執濤塗。執者曷爲或稱侯、或稱人。稱侯而執者、伯討也。稱人而執者、非伯討也。此執有罪、何以不得爲伯討。古者周公東征則西國怨、西征則東國怨。桓公假途于陳而伐楚、則陳人不欲其反由己者、師不正故也。不脩其師而執濤塗、古人之討、則不然也。」

⑧ 小論は『法言』の引用に『揚子法言』十三卷（四部叢刊所收影印石硯齋翻宋治平監本）を用いているが、『纂圖分門類題五臣注揚子法言』十卷（前出）は「軸」字を『毛詩』と同じ「柚」としている。

⑨ 『孔子家語』好生により「矣思其人必愛其樹」の八字を補う。

⑩ 『漢書』藝文志・六藝略・詩に『魯故』二十五卷が著録されている。『詩經』關連著書については『歷代詩經著述考』（劉毓慶、中華書局、二〇〇二年）を適宜参照した。

⑪ 『法言義疏』の原文は以下の通り。「按、子政世傳魯詩、此所引詩傳必甘棠『魯故』文。『法言』此文云「述職」、云「其思矣夫」、亦皆本詩傳爲說。『漢書』王吉傳載吉上疏諫昌邑王云「昔召公述職、當民事時、舍於棠下而聽斷焉。是時、人皆得其所。後世思其仁恩、至乎不伐甘棠、甘棠之詩是也。」吉傳韓詩、而此疏云云、與『說苑』引傳全合、是魯、韓說同。」

⑫ 「自陝而東者、周公主之、自陝而西者、召公主之」とあり、『說苑』の「陝以」が「陝而」に変わっている以外に差異はない。

⑬ 余嘉錫『四庫提要辨證』子部・新序などに詳細に論じられている。

⑭ この章の全文は以下の通りである。「睠之馬、亦驥之乘也。睠之人、亦顏之徒也。或曰「顏徒易乎。」曰「睠之則是。」曰「昔顏嘗睠夫子矣、正考甫嘗睠尹吉甫矣、公子奚斯嘗睠正考甫矣。不欲睠則已矣。如欲睠、孰禦焉。」

⑮ 義疏の原文は以下の通り。「按、此魯詩說也。『史記』宋世家贊云「襄公之時、修行仁義、欲爲盟主、其大夫正考父美之、故追道契・湯・高宗所以興、作商頌。」遷爲申公再傳弟子、說詩皆本魯義。」

⑯ 劉立志『漢代《詩經》學史論』（中華書局、二〇〇七年）は、第四章第一節「司馬遷之《詩經》學」において司馬遷が魯詩以外の詩説も兼習していたことを論じている。

⑰ 『法言』李軌注に「奚斯、魯僖公之臣也、慕正考甫、作魯頌」とある。

⑱ 『文選』王延壽「魯靈光殿賦」も序に「故奚斯頌僖」と言い、李善注に「韓詩曰「新廟奕奕、奚斯所作」。薛君曰「奚斯、魯公子也。言其新廟奕奕然盛。是詩公子奚斯所作也」とある。ほかに『後漢書』曹褒傳にも「昔奚斯頌魯、考甫詠殷」とあり、李賢注に「韓詩曰「新廟奕奕、奚斯所作」。薛君傳云「是詩公子奚斯所作也」と言う。なお、陳喬樞『齊詩遺說攷』（卷四）は曹褒の家が慶氏禮を修めており、慶普が詩は后蒼の弟子であることから、曹褒を齊詩とする。

⑲ 白川靜『詩經研究通論篇』は『法言』本章を引き、「周初至治ののちを承けて、康王のときはじめて刺詩が起ったとするもので、これが當時の通説であつたらしい」と述べている。（第一章、一、周南・召南、『白川靜著作集』十、八二頁）

⑳ 解麗霞『揚雄與漢代經學』（廣東人民出版社、二〇一一年）は、『太玄』が費氏易、『法言』が『魯論語』に基づくとするものの、『詩經』ほかの今古文説は検討せず、王青説を批判して「其思想不可能純屬古文經學家或今文經學家…應爲處在今古文之間的學者

型經學家」(四四頁)と述べている。

- ②① 劉歆「移書讓太常博士書」に「至孝武皇帝、然後鄒・魯・梁・趙頗有詩・禮・春秋先師、皆起於建元之間。當此之時、一人不能獨盡其經、或爲雅、或爲頌、相合而成」とある。

- ②② 辭賦や文における『詩經』の援用は、張震澤『揚雄集校注』(一九九三年、上海古籍出版社)が概ね言及しており参考になる。

- ②③ 張游卿については『漢書』儒林傳に「張生兄子游卿爲諫大夫、以詩授元帝」とあり、この「詩」は魯詩を指している。高嘉は『後漢書』高詡傳に「高詡字季回、平原般人也。曾祖父嘉、以魯詩授元帝、仕至上谷太守」と見える。伏理はかの伏生の子孫であり、匡衡より齊詩を授かり、成帝に傳授している。(『漢書』儒林傳、『後漢書』伏湛傳)

- ②④ 各博士の時期の特定には困難が伴うので、今は洪乾祐『漢代經學史』上・下(一九九六年、臺中・國彰出版社)第三章の説に従う。

- ②⑤ 『漢書』儒林傳に「元帝好儒、能通一經者皆復。數年、以用度不足、更爲設員千人、郡國置五經百石卒史。成帝末、或言孔子布衣養徒三千人、今天子太學弟子少、於是增弟子員三千人。歲餘、復如故」とある。

- ②⑥ 趙賓については『漢書』儒林傳に次のように見える。「蜀人趙賓好小數書、後爲『易』、飾『易』文、以爲「箕子明夷、陰陽氣亡箕子。箕子者、萬物方蓂茲也。」賓持論巧慧、易家不能難、皆曰「非古法也。」云受孟喜、喜爲名之。後賓死、莫能持其說。喜因不肯仞、以此不見信。」他に經學を治めたと伝えられる者として、『易』と『春秋』に優れた巴郡の譙玄、博士に學び、『易』を治めた蜀の人何武があり、拙論「蜀における楊雄の處世と學問」(『立命館文學』五九八、立命館大學人文學會、二〇〇七年)四章にて検討を加えた。

- ②⑦ 『漢書』循吏傳に次のように見える。「文翁、廬江舒人也。少好學、通『春秋』、以郡縣吏察舉。景帝末、爲蜀郡守、仁愛好教化。見蜀地辟陋有蠻夷風、文翁欲誘進之、乃選郡縣小吏開敏有材者張叔等十餘人親自飭厲、遣詣京師、受業博士、或學律令。…又修起學官於成都市中、招下縣子弟以爲學官弟子、爲除更繇、高者以補郡縣吏、次爲孝弟力田。」また『三國志』秦宓傳の「答王商書」に「文翁遣相如東受七經、還教吏民、於是蜀學比於齊魯」とある。

- ②⑧ 『華陽國志』卷三・蜀志に「孝武帝皆徵入叔爲博士。叔明天文災異、始作『春秋章句』。官至侍中、揚州刺史」とあるが、同書



卷十・先賢士女總讚論には「張寬字叔文、成都人也。蜀承秦後、質文刻野。太守文翁遣寬詣博士。東受七經、還以教授。…作『春秋章句』十五萬言」とある。張叔と「張寬字叔文」は同一人物であるらしい。

②⑨ 嚴遵については注①にて言及したが、他に『華陽國志』卷十には「雅性澹泊、學業加妙。專精大易、耽於老莊。…授老莊、著指歸、爲道書之宗。楊雄少師之、稱其德。」とあり、『隋書』經籍志には「漢徵士嚴遵注『老子』二卷。『老子指歸』十一卷嚴遵注」と二書が著録されている。

③⑩ 楊雄と劉歆には往復書簡がある。拙稿「楊雄「答劉歆書」譯注」(前出)、「楊雄「答劉歆書」とその小學」(『立命館白川靜記念東洋文字文化研究所紀要』二、立命館白川靜記念東洋文字文化研究所、二〇〇八年)にて検討している。

③⑪ 姚振宗『隋書經籍志考證』(卷三『韓詩翼要』)は次のように述べている。「苞、芭字形相近、義亦相通、故自來傳寫不一。其稱侯苞者、則又苞之誤也。『論衡』案書篇有云「子雲作太玄、侯鋪子隨而宣之」則其字鋪子。唐・王涯「說玄」稱「鉅鹿侯芭子常」則又字子常。由是知揚雄傳「芭」下斂「子」字、其原文則云「而鉅鹿侯芭子常」(筆者注：『漢書』闕「子」字)從雄居「下文王邑・嚴尤謂桓譚曰「子常」(筆者注：「常」字、『漢書』作「嘗」)稱揚雄書、豈能傳於後世乎。」此稱子常即謂侯芭、非稱桓譚。芭不知卒於何時、或亦與桓君山至光武世、所著又有『法言注』見本志子部儒家、又有『太玄注』見王涯「說玄」。今所傳『太玄』釋文出自侯芭云。」なお『韓詩翼要』は佚書だが、『毛詩正義』「斯干」「白華」「江漢」「抑」に「侯苞(侯包)說」として見える。

③⑫ 「答劉歆書」に「張伯松不好雄賦頌之文、然亦有以奇之。常爲雄道、言其父及其先君憲典訓、屬雄以此篇目頻示之。伯松曰「是懸諸日月不刊之書也」」と見える張伯松が張竦、父が張吉、先君が張敞である。杜鄴、杜林、范逵については『漢書』藝文志、張敞傳、杜鄴傳、『後漢書』杜林傳、儒林傳などに見える。

③⑬ 『漢書』藝文志・六藝・小學に「漢興、閭里書師合『蒼頡』『爰歷』『博學』三篇、斷六十字以爲一章、凡五十五章、并爲『蒼頡篇』。…『蒼頡』多古字、俗師失其讀、宣帝時徵齊人能正讀者、張敞從受之、傳至外孫之子杜林、爲作訓故、并列焉」とある。

③⑭ 拙論「楊雄「答劉歆書」とその小學」(前出)二四頁参照。